
日常的一幕

蒼月 紡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日常的一幕

【Nコード】

N3285F

【作者名】

蒼月 紡

【あらすじ】

日常。それは誰のそばにでもあり、誰にとってもきつと大切なもの。これは普通の学生の、ごくありふれた日常を描いた物語。きつとどこにでもある。他愛のない物語。でもきつとそこに大切なものがある……のかなあ？まあつまりこれはごく普通の学生の日常を描いたものってことですね

第0幕 夢でした

桜舞い散る、春のうらかな陽気の中。

俺は一人の女の子にこの木の下で告白すると必ず成功するという、そんなありがちな言い伝えがある場所に呼び出されていた。

呼び出されたといっても直接ではない。

朝、何気なく下駄箱を見ると可愛らしい封筒に可愛らしい文字で放課後、大事な話があるのでこの木の下で待っていてくださいと書いてあった。

もちろん最初は誰かの悪戯じゃないかと疑った。

しかし、あらゆる観点、独断、偏見、想像および妄想、そして俺自身の願望からそれはないと判断しここにやってきた。

……まだこないのかな。

こんなところに呼び出されているんだ。用件はきつと一つ。

そう思うと顔が熱くなり、鼓動が高鳴る。

相手の顔も性格も名前さえも分からない。

だけど、だからこそこの緊張感と高揚感が入り混じったようななにもいえない感覚が味わえる。……まあそれはかなりの危険を同時にはらんでいることでもあるのだが、何とかなると思っている思おうとしている。

とりあえず了承のとき、保留のとき、断るときの三つの対応法を考えようとしたとき、後ろに誰かの立つ気配があった。

「遅く……なりました……」

可愛らしい声。聞いたことがない声だ。誰だろう？

否が応でも鼓動は高まり、心臓はもう爆発するんじゃないかというくらいに音を立てる。

ごくり、と口の中に緊張でたまっていたつばを飲み込み、覚悟を決める。

そしてうつむき加減になりながら彼女のほうを向く。

見えるのは足。細くすらつとしていて、これだけでも彼女のスタイルがいいということが十分に分かる。

そして徐々に顔を上げていく。

徐々に彼女の全体像が見えてくる。

今見えるのは胸。男と女で大きく違うその部分は思春期の男子が見る本に比べるとだいぶ小ぶりに見えるが、しっかりとその存在を主張している。

そして顔が上がりきりついに彼女の顔が見える。

そこにいたのは。

「……はっ」

次の瞬間、俺の顔に映っていたのは彼女の顔などではなく、見慣れた自分の部屋の天井だった。

「夢……なのか……？」

だんだんとぼんやりとしていた頭がハッキリとなるにつれて、こみ上げてきたのは脱力感と恥ずかしさだった。

高校生にもなってこんな妄想全開の夢を見るなんて……。

自虐モードに入りながら、自分の夢に自分でツツコミを入れていく。

まずなんだよあのシチュエーション。ありえないだろ。

桜の木の下で告白すれば必ず成就するなんて、それどんなエロゲ？ 枯れないんですか？ 魔法の桜なんですか？ もうホント何なの俺。死ねば？ 死ぬよ、死ねよ。

疑問、確定、命令をなぜか自分で自分に言いながら、ベッドから起き上がる。

時計は六時ぴったりを指している。

いつもより少し早い時間だが早起きは三文の得とも言うし、損はないだろ。

そう思いながら俺 あかさかともや 湊坂智耶はとりあえず顔を洗おうと洗面所に向かう。

冷たい水で顔を洗い、まだ少しぼうつとしていた頭が目覚める。

その時、ふと思い浮かべたことはある意味不思議なものだった。

また今日もいつもと同じような楽しい一日が始まるなあ。

今日何が起こるかわからないというのに、何故か楽しい一日になると分かる。

だって、そう思うんだ。

今日はきつと楽しい日だって。

それが何時も通りだから。

朝食を食べ終え、制服に着替えた俺は玄関を開け、日常へと足を踏み出す。

楽しくて温かくてたまに悲しく、でも最後は皆が笑ってすごす日常へ。

「行つてきまーす」

さあ日常の始まりだ。

第0幕 夢でした（後書き）

ジャンルはコメディなんです笑える要素があるのか分からない作品。

まだまだ拙い文章力ですが精一杯書いていきたいと思ひます。

……もう一個のほうもがんばりたいなあ。

第1幕 登校風景

「やつほー。智耶くん、おつはよー」

気分良く学校への道のりを歩いていた俺はその声を聞いたとたん、さつきまでの機嫌の良さはどこへやら。ものすごく不幸な気分になった。

「……………」

とりあえず返事を返すのもだるいし返す必要もないし無言を決め込む。

まったくホントにコイツは俺を不機嫌にさせるやつだ。

コイツが現れたせいで気分が悪くなったので謝罪を要求する権利が俺にはあるのではないかと思えなくもないと思えるような気がする。

「おーい？ きいてるかーい。可愛い女の子が話しかけてるんだよー？ 返事ぐらいしよーよー」

「……聞こえている、しかし返事をしなきゃいけない義務はない。なので返事をする必要はない」

「いや、返事して」

「今のが返事だという反論は認めない」

そいつってやると突然現れては俺を不愉快にして帰っていく見た目だけ見れば可愛いといえなくもないような幼馴染 高梨奈々香

たかなしななか

はむー、といった表情で黙り込んだ。

さてこういう時は何から説明しようか。多分男性諸君は見た目とか胸の大きさとか性格とかを知りたいと思うと思うんだが……間違っていないよな、男性諸君？

ではまず性格についてからだ。これはなんていうかそのいつもは皆が想像するギャルゲーやらエロゲーに出てくる美少女そのものだ。誰彼構わず世話を焼き、時にかわいい一面を見せ、あたかも自分に気があるかのように見せつける。だがそれは悪魔で仮面をつけた

姿。世の男たち 本来はただ一人のためにらしいが 絶望の
どん底に叩き落とすために古今東西、ありとあらゆるエロゲーギヤル
ゲーを研究し、手に入れた偽りの性格なのだ！（ちなみに古今東西
の使い方間違ってないか？ って気がするがそれはきつと気のせい
だ。気にするな。気にしたら負けだからな）

……さてなんか前置きが長くなつたが要約すると奈々香の性格は
”腹黒く人の心を弄ぼうとする最低の女”だ。

実際に見てもらったほうが早いだろう。

奈々香のほうに振り返るとようやくさっきの言葉に対して反論を
見つけたのかそれはそれは天使のような愛らしい笑顔でこういった。
「智耶の癖に私に逆らうなんて、生意気にもほどがあるわよ？」

ほらな？ 本性が姿を現した。見ててみな、きつとまだまだ続
から。

「あんたは犬みたいに飼い主である私の言葉に従ってればいいのよ。
私が挨拶をしたらあんたも挨拶を返す、これは義務よ」

義務というものはしなければならぬものであり、挨拶とは返す
べきものではあるが返さなければならぬものではないのでは？

「今、何思ったか言ってごらんさい？」

「いや、別に何も」

「ほんとーに？」

ずいっと身を乗り出しながら声と表情は可愛く、だがどこか底冷
えるような感覚をまといながら奈々香は問いをぶつけてくる。

「……嘘はつかないよ、お前にだけは」

そんな彼女に向けて俺はとても優しい表情で微笑みその言葉を言
ってやる。

「智耶……そんなに私のことを……」

「まあ嘘」

「なんて、言わないわよね？」

奈々香はいつの間にか手にしていたモノを俺の首に突きつけなが
らそう言った。

「うふふ、うれしいなあ。智耶がそんなに私のことを愛してくれてたなんて……」

何かがヤバイ。

ぶつぶつと何かを呟いている奈々香の表情はどこか虚ろで目の焦点があつていない。そのくせ手に持っているモノだけは俺の首に突きつけていやがる。

ああ、ちなみに俺の首に突きつけられているモノは薄々感づいているとは思うがナイフだ。しかも本物の。

そんなのが喉に当てられているのだ。もし今、ナイフを引かれたら俺は確実に死ぬ。血が傷口から噴出して死ぬ。

そんな死にかたはごめんだ。まるで鋸で殺され、原作を超えたなんて呼び声もあるアニメで殺されるヒロインみたいだ。なんというかNice boat?

とりあえず何かこれから抜け出す方法を考えよう。俺は生きる。

生きなきゃいけないんだ！

だがどうやって？ それを考えるんだろうがよ！

自分で自分にツツコミ（確か前もやったような）ながら今度はしっかりと考える。

ひとつだけあった。この場を抜け出す方法。

確立は万に一つ。しかし成功すれば確実に抜け出せる！

まだ何か言っている奈々香を無視して時計を確認する。時間は…

…よし、まだいける。

気づかれないようにすこし後ろに下がる。

それに気づいた奈々香が少し前へ進む。

よし後もうちょっと、もうちょっと……。

目標地点まであと数十cm。

この一歩で……！！

「あ、おっはよー。奈々ちゃんに智ちゃん」

深刻な空気をぶち破る一声。底抜けに明るいその声は俺に安堵感と脱力感をもたらした。

その声の主は雪邑弥生^{ゆきむらやま}。唯一奈々香が気を許している相手だ。

「おはよう、弥生」

「朝から何やってるのー？」

「ああ、聞いてくれよ雪邑。今コイツに」

「なんでもないの。ちよつとゴミが付いてたからとつてあげてただけ」

さり気無い仕草でナイフを隠しながら弥生のほうに振り返る。

そのときにはさっきの表情はどこへやら、完全にいつもの奈々香になっていた。

ふふ……計画通り……！！

これが奈々香を無効化し俺が生き残れる唯一の作戦……弥生大作戦だ！

説明しよう！ 弥生大作戦とはいつもこの時間にこの道を通る奈々香の無二の親友である弥生を利用し、なんだかヤンデレモードに入り仮面が外れていた奈々香に一瞬にして仮面を装着させられる画期的な作戦なのだ！

ああ……時々自分の頭の良さが怖くなる。

なんたつて俺の頭の良さときたら八神さんちのお子さんを軽く超え世界一の名探偵は遙か下、頭脳一つと王の力によって世界最大の帝国を潰した皇子ですらも凌駕するほどだからな。

「智ちゃんさっきから何をぶつぶつ言ってるの？　ちよつとこわいよ？」

自己陶醉に浸っていた俺を弥生の一言が現実へと呼び戻す。

危ない危ない。つい自分の頭の良さに感動して思っていたことをすべて口に出してしまっていたらしい。

まったく、そんなことは普通ならないつての。そんなことするのなんて馬鹿で鈍感でお気楽なラノベやらギャルゲやらの主人公ぐら이다よ。

俺は決してそんなキャラではない。ホントに違うからな？　覚えとけよ？　魂に刻み込み、末代まで忘れるべからず。覚えとけよー。

第1幕 登校風景（後書き）

なんだかごちゃごちゃな小説。

文章力がなく未熟な作品ですががんばって書いていくんでよろしくです。

感想、アドバイス等もらえるとさらに嬉しいです。

第2幕 理不尽な世界

クラスが違う弥生と別れ、奈々香と一緒に教室に入る。その行為は学生なら毎朝体験する日常の一瞬。そこに危険なんてあるはずがない。いや、あつてはいけない。だがこの日、この時だけは違った。

「どいてくれーっ！」

教室に入った瞬間、そんな声が聞こえてそれと同時に俺を強い衝撃が襲った。

「ごふっ」

正面衝突。大きな声を上げながら俺 正確には教室の外に、だろうが 向って走ってきたクラスメイトを、俺は当然のことながらよけることはできなかった。

かなり派手な音がして、俺もクラスメイトもたまらず尻もちをついてしまっていた。

「大丈夫！？」

流石の奈々香もこういったときには猫をかぶらずちゃんと心配してくれるらしい。それが少しだけ嬉しかった。

「あ、ああ。それよりも、ぶつかってきた奴のほうが悪症なんじゃ……」

実際俺は少し頭が痛むぐらいで何の問題もない。すこし腫れるかもしれないが、2、3日もすれば元通りだ。

だが、ぶつかってきたクラスメイト 平戸恭介はさっきから微動だにしない。まさかとは思うが気絶しているんじゃない……。

心配になった俺は起き上がり、恭介のほうに近づく。

「おい、大丈夫か？」

「……………」

「……返事がない。ただの屍のようだ」

目を閉じたまま反応のない恭介に対して、奈々香はそんなことを

言い始める。その口ぶりからは恭介のことを心配している様子は微塵も感じられなかった。

「ふざけてる場合じゃないだろ。とりあえず、保健室に連れて行かないと……」

「……理不尽だ」

「え？」

そんな声が聞こえた。下のほう、恭介の倒れているあたりから。

「……理不尽だ！」

突然恭介が起き上がり、再びさっきと同じ言葉を繰り返す。

「この世界は、理不尽だああ……！」

三回目。今度は咆哮と呼ぶにふさわしい音量で。

「なんで！？ どうしてっ！？ どうしてお前だけが奈々香ちゃんに心配してもらえて俺は心配してもらえないんだ！？ 絶対におかしい！ この世界は狂っている……！」

なんなんだろう、こいつは。

正直、今この時この瞬間にこいつと関わっていたという事実を切り捨てて赤の他人になりたい衝動にかられる。

しかしそんなことをするのはこいつにとって酷なことだろうからしょうがなくそれは今度の機会に回すことにする。

恭介のほうを見るとまだこの世界はオカシイだの宇宙からのメッセージだの変なことをほざきまくっている。気のせいだと思いたいが多分気のせいではなく俺の耳が告げている事実として時間が経つに連れて恭介が言っていることが段々と電波じみてきているような気がするがきつと気のせいだろうと思ひ込むことによって俺の中では恭介がまだまともな人間なんだと認識することができる。

「ねえねえ智耶？ 恭介くんはどうしちゃったの？」

恐らく原因のひとつはお前なんだろうし、俺にも責任はあるとは思うが究極的な部分では恭介のせいでもあるような気がする。

まあでも恭介の尊厳も守ってやりたいからこう言っておくことにする。

「夏だからさ」

窓の外には日本の春を彩る桜が咲き誇っている。風が吹く度に、花びらが舞いさながら映画などのワンシーンのようでもある。

ああ、春だな。

どっかで春ですよーって言う声も聞こえる。

「智耶……あんた、頭大丈夫？」

再び心配される俺。しかも心なしが先程よりも心配の度合いが上がっているような気がする。あれ、なんだろうこの気持ち。奈々香のあの、俺をどこか危ない人を見るような目を見てみると、胸が熱くなってきた。なんともいえない不思議な気分が襲われる。

もしかしてこれが、これが恋なのか！？

「あたしに恋してくれるのはうれしいけど今の智耶のそれは恋じゃないわ」

一刀のもとに俺の恋（勘違い）は切り伏せられた。

ひどいな。俺の純情は真実という鋭い刃によって斬られてしまった。

「そんなことよりも、恭介くんを何とかしないと。だんだんやばくなってきたわよ」

「ごんげー！ ごんげー！ ごんっげえええええええっ！！！」

うわなにあれ。マジきもいつてかマジヤバイ。変なダンスしながらごんげーとか叫びまくってやがる。あれって人間？ いや、きつと違うな。俺の知ってる人間はごんげーなんて叫ぶことはないし。というかごんげーって何よ？ 権化？ 巖毛？ もう意味がわからない。あいつはもうダメかもしれないな。

「いやいやいや。智耶は恭介君の親友なんだから助けてあげないとダメでしょ」

「何をおっしゃるんですかお嬢様。私なんか親友なんているわけがないでしょう。そんなもの必要ありませんしね。私にはお嬢様さえいればいいですよ」

「へーそーなんだー」

これは酷い棒読み。どうやら俺たち二人に役者としての才能はないようだ。ちなみに棒読みなのはいやいやいやからだね。つかまた俺心の中が外に駄々漏れだったみたいだな。気をつけよう。

「気をつけようって言葉すら外に漏れてるけどね」

「細かいことは気にすんなガール」

「くけっ！ くけっ！ くけけけけ…… きよけええええっ！！！」

恭介オワタ。なんかもう妖怪みたいになってきた。名前をつけるなら恐怖！ 奇声男みたいな感じかな。え？ それは名前じゃないって？ んなこたあわかつてるよ。けどな世の中にはこんな言葉がある。一度しか言わないから耳の穴かっばじってよく聞けよ？

いいか？ 言うぞ。

「細けえ事は気にすんな！」

「智耶までおかしくなつたわ……」

まあふざけるのはこころへんまでにしよう。そろそろ真面目にあってを元に戻してやらないと、大変な事になる気がする。

具体的に言うところそろ先生が来るから多分それまでに恭介を元に戻しとかないと俺たちには明日はこないだろうな。冗談とかじゃなく。

「よくわかつてるじゃないか。先生のことをそこまでお前が理解してくれていたとは、いやはや。こんな教え子を持てて私は幸せだな」

「あ、刀湖先生、おはようございます」

「おはよう高梨。少し離れていた方がいいぞ」

「はい」

元気よく返事をしてとてとてと教室の隅の方へ歩いていく奈々香。いつの間にかクラスメイトも全員隅に固まっている。なかなかシユールな光景だ。いったい何が始まるんです！？ って知らない人なら叫びたくなりそうだな。

……さてと、突然現れたこの人。やっぱり物語的には紹介しとくべきだよな。

神条刀湖、24歳。

「さあ、構えろ淦坂」

職業、教師。

「いやつまって……！これには海ほど深いわけが……！」
好きなもの、可愛いもの及び教え子。

「ごんげ？」

そして嫌いなもの。

「問答無用だ！消し飛べ！」

淦坂智耶及び平戸恭介。

「理不尽だああああつ……！」

こんな俺たちの日常。少しハチャメチャだけど、とても、とても大切な宝物。

今日という一日はまだまだ続く。

第2幕 理不尽な世界（後書き）

なんと年単位ぶりの投稿。しかも話しがぐちゃぐちゃ。まさに力オス。こんな誰も見えないけれど自己満足のために書いていきます。これからもたまりに更新していくかも知れません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3285f/>

日常的一幕

2010年10月9日04時31分発行